
リリカル転生記

高町 N A O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル転生記

【Nコード】

N30400

【作者名】

高町 NAO

【あらすじ】

転生……

そんなもんじゃないと思ってたんだけどな……

それでも、頑張ってみるか。

感想お待ちしてます！
前作終わってないのに投稿……
こちらでも宜しく願います。

prologue

目の前に迫ったトラックを見つめながら俺は時間が遅くなったように感じた。

今までの思い出が頭の中を流れ、ガシャンッ、と大きな音を立てて俺に衝突する。

衝撃で道路を一回二回と回転し道路脇の電柱に衝突して回転が止まる。

よく即死じゃなかったな……

周りの人が騒いでいるのに場違いなことを考えているが、体に力が入らないことから危険なことは……いや、もう長くないだろう。

何でこんな……って考えている暇もなさそうだな……

最後に思い浮かぶのはただ一人の家族

「う……めん……かあ……さん……先に……とうさ……んの……所に……」

その言葉を最後に、意識を手放した……

ここは……………？

不意に目が覚めると病院独特の薬品のおいが鼻についた。

俺は助かったのか……………？

でもあの怪我だぞ、へたすりや即死ってレベルじゃ無いだろ……………

それに目の前がうまく開かない、なんも見えやしねえ

そんなことを考えていたらドアの開く音と人が入ってくる気配、そして俺の近くで会話しだす。

一体全体どうなっちまったんだ、俺？と言っよりさっきからやけに眠気が……………ダメだ…眠い……………

「とっても元気な赤ちゃんですよ、ラット。」

「ああっ良くやったな、ナルミ。この子の名前なんだが、」

赤ちゃん？名前？なに言ってるんだ、この人たち……………

「この子の名前は、ナオト」ヴァンクル。私たちの名前をもじってみたんだが……………」

あんたらの名前だとか知らん！！俺には……………って名前が……………

「ええ、いい名前だわ。これからよろしくねナオト」

反論してやりたいのに声が出ない……………それに眠気もピークで……………もー無理……………

そして俺はまた意識を手放すのだった……………

と、昔のことを思い出しながら積み木遊びをする俺・ナオト「ヴァンクルーも4歳になりました。

初めは何がなんだかわからなかった俺だが少し周りを観察していてよーく理解した。

体が動かないのは怪我のせいだと思っていたが、周りで会話する男
今の父さんーと女 今の母さんーの会話の内容に、魔導師、魔法、
騎士などの言葉が出たのをきいて

この人たちイイ大人なのにかわいそうな人たちだな…つか、人の病
室でそんな会話しないでくれよ……

とか思っていたのだが、自身の体を確認しようとして絶句した……

手……小さくね……て言うか俺が小さくね……

なにこれっ？ありえないんですけど！？ ……気がついたら体が縮
んでしまっていた的な

体は子供、頭脳は大人、その名は名探も、って現実逃避しとる場合

か！？

「きつとあなたのような騎士になれますよ」

「ああ、ユウトも二歳になって、もう話し始めたしこれから楽しみだよ」

ええ、と女の人が返した

なんてこった……これって……

……思い返すは高校時代の友達

転生だー何だ騒いでいたのを鼻で笑ってやって、

「ねーよ（笑）」

と断言したが……ごめん権田薫くん、転生、あった……

……というわけだ。……誰に説明してんだ？……俺？

とまあ俺のことはいい……

ちなみに新しい母さんー積み木で遊ぶ俺をみて笑っているーの名前はナルミゝヴァンクル。

綺麗なおねーちゃんだなー、とか思ってこれまで4年間……話を聞くと今年で30歳になるらしい

ありえないだろ、見た目高校生なんすけど……

つか家の父さんも今年で32歳だそうだがこちらも若い……

ちなみに母さんは専業主婦、父さんは時空管理局？の執務官とか言う公務員さんーしかもエリート職業　だそうだ

そしてこの世界、なんと魔法があるそうなの

はじめは疑っていた俺だが父さんに

「そーらナオト、たかいたかい」

といわれながら上空500mまで連れて行かれたときはさすがに信じた

そしてもう一人

「ただいま、親父、お袋。」

「お帰りユウト。さて、お兄ちゃんも帰ってきたからご飯にしましょうね」

外で遊んできた兄 ユウト「ヴァンクルー、この兄貴はなんでもか
なりの早熟児らしく二歳には会話ができるようになっていたらしい
が、俺はこの兄貴が苦手だ

その理由は……

母さんが買い物にいつて兄貴に俺をまかせたとき、俺の部屋に一人
で来て独り言を言い始めたり、ときどきブツブツと意味不明な単語
リリなのだの、ハレームだのーを

「フヒフヒ」

とか笑いながら呟いたりするんだよこの子、あの時は心から引いた
ね……

普段はわりとまともだがな、たまに変なんだよ……家の兄貴……

でも6歳で魔法がAランク？はすごいらしく世間では天才扱いだし、別に嫌いじゃないが、一回もった不信感はなかなかぬぐえないって言うか……

そんな感じの俺の家族だ

まだまだ不安はあるがこれからがんばって生きて生きたいと思う……

……がんばれるといいな……

Episode 1

「ちゃんとよける！！ナオト！！」

「ふざけんな！？現役AAA+の執務官の全力の弾幕避けれる奴の
ほうがすくねーんだよ！！くそクロノ！！」

「まだ本気ではないんだが……」

「マジかよ！？」

何でこんなことに……………

あれから5年が経ち俺 ナオト〃ヴァンクルーは9歳になりました。

この馬鹿上司 クロノ〃ハラオーナーにおもつきしシゴカレテマス……。

こんなスパルタ野郎との再会と言つのが……まず……

ナオト6歳 訓練校

「おや、君は!？」

いきなり全身黒ずくめの男の子に話しかけられた

というかどっかで見たような……？

「君はラット＝ヴァンクルさんの息子さんではないか？」

あっ！

「確かリンディ提督の息子さんの……クルトさん？」

「違う！？僕の名前はクロノだ！！」

あー、たしかそんな名前だったような……………

「しかしいつの間にか大きくなって。」

「君は小さいままだね（笑）」

「よし模擬戦だ、本気で相手してやる」

ってな感じでキレさせたのが出会い……

いやいや、あの時の俺は若かったねえ。なんせ難関の執務間試験2回で合格とかする化け物に当時魔導師ランクBの俺がケンカ売れたよ……………結果？

開始5秒でノックアウトされましたよ。

無理だから、開始早々ステインガーレイEXなんたらかんたら展開してバインドで縛ってスフィアを一斉射撃で……………そのさき？気づいたら訓練校の医務室でしたよ……

「よそ見せずに集中しろ!!」

「だー!!?そろそろ限界だよ!!クロノ!!」

「せっかく長期任務で新人のお前を鍛えているんだ。レアスキルなしで僕に勝ってみろ」

「勝とうとはしてんだよ!?!」

ちなみに何でこんなことになっているのかと言つと……………

ナオト8歳 訓練校

「兄貴は執務官試験落ちたらしい。」

「一度や二度で受かるほど簡単じゃないからな。」

「二回目で受かってるやつが何言ってるの……」

テーブルを挟んでクロノと向き合い会話する

内容は兄貴の試験のことと俺の進路のこと

「まあ、ユウトのことは置いて……お前はどっするんだ?」

「俺？特に決めてないけど。」

卒業間際でまだ就職先が決まってない俺、いや誘いは何件も来てるんだよ、これでも魔導師ランクA-だから。まだ決めてないだけで

……

「単刀直入に言おう。ナオト、うちの艦にこないか？」

「アースラにか！？そりゃありがたいがどうして？」

目の前に置かれたカップに口をつけ一息置いてからクロノは

「僕の意味じゃない、だが母さんがな……」

「リンディ総督が？そりゃまた何でよ？」

「クロノもそろそろ補佐をつけても良いのでは？と言われてな、消去法でお前となったわけだ。」

「なんととはた迷惑な……。て言うか兄貴に頼めよ。執務官補佐って試験でかなり優遇されんだろ？それに兄貴のランクはAAA、俺なんかより適任だろ？」

しかしそう言うときクロノには珍しく苦い顔で

「僕はユウトのことがあまり好ましく思えないから君に頼んだんだ、頼むアースラに来てくれないか」

とそこまで言われて俺は首を縦に振った。

んでアースラ、クロノの補佐官となったわけだ。

ちなみにこの話 アースラに誘われた事とクロノの補佐官になること を家族にしたら、父さんは

「がんばれよ、補佐といっても仕事内容は執務官とさして変わらんからな。」

と激励とアドバイスを、母さんは

「あらあら、ナオくんもエリート街道まっしぐらね おうちも安泰
だわあ」

と少しずれた発言を、まだ軌道に乗ってないので安泰ではないので
す、母さん……

そして……、兄貴はというと………

「なんで俺じゃなくてお前！？もっとクロノの高感度上げとくん
だっつたー！ー！」

そしていつものブツブツモードへと突入した

んで、無事に訓練校を卒業した俺は晴れてクロノの補佐官、アースラの乗務員？になつたわけだが……

今回の初航海が始まり館長のリンディ提督、アースラのオペレータ一陣、武装隊に挨拶を済ませ仕事に取り掛かるうとしてクロノに声をかけられ

「ナオト模擬戦するぞ。稽古つけてやる。」

といわれ訓練校で凹られたことを思い出し、やんわりと断つたがアツサリ理論（ロゲンカ）で負け、今の状況……………

「そら仕上げだー!!」

クロノがそう言うとナオトの体にスカイブルーのバインドが絡みつく

「っ！？やべっ！？」

そしてクロノの足元にミッドチルダ式の魔方阵が展開され

「>Blaze cannon<!!」

トリガーワードを叫び、ブレイズカノンを放つクロノ

そして何とか避けようとするものも、バインドがかかっている思い出し

「いやあああ！？！-」

あえなくノックダウンされるのだった……

リリカル転生記

E p i s o d e 1

ノックダウンされ目を覚ました後、俺はアースラのブリッジに来ていた。

「なんすか……俺、体痛くて仕事したくないんですが……」

「いや……そこまではしてないと思うのだが……」

俺の言葉にクロノが返す、正直死ぬかと思ったよ!?

非殺傷設定でも痛いもんは痛いんだかな、このやろう!!

「クロノ君の訓練はきついつて武装隊の人たちも言ってるからね」

「エイミィさん、もっと言ってやってください!!」

クロノとの会話に、いすに座ったまま顔を向けずにオペレーターのエイミィ「リミエツタさんが笑いなから言う。その言葉に周りにいた武装隊の人達はウンウンと頷いていたりする。

「エイミィ……、ナオトはこのくらい叩かないと成長しないと思うのだが……」

クロノよ……、それで俺がお亡くなりになっても良いのか……?

主に精神的なほうで……

そんな会話をしていると

「みんな、本局からの依頼が入ったわ。準備して。」

艦長のリンディさんが声をかける。それにクロノがどのような依頼なのかを尋ねると、なんでもロストログiakラスの魔力反応が無人（文化レベル0）の世界から確認されたらしい。

その調査、確認、確保が今回の依頼らしい。ってか……

「アースラ着任後の初任務がロストログiakの回収とか……」

難易度高くないか……、まあ俺が担当になるわけ無いから大丈夫b

「先発隊にはクロノと補佐官のナオトくんに行ってもらっわね。」

ちよっ！！！！？

「了解です。」

クロノも了解とか言ってるじゃねーよ!?

ちよつと俺の実力を思い出して、クロノ……………

封印魔法……………適正ほぼ無し、簡易の封印魔法のみ使用可能。

――

訓練校でこのデータが出たときは一日中へこんでたなあ……………

だって封印だぜ!! 俺だってカッケー封印の呪文とかいって見たかったんだよ……………(泣)

そんな俺がロストログシア系統の、しかも海が受け持つような代物相手じゃまったくの役立たずじゃないですか? と確認するとリンデ伊さんが

「執務官になるための訓練だと思って」

……だそうだ。

リンディさん……俺、……別に執務官になりたくて、クロノの補佐官をやってるわけではないのですが……

つと言うかクロノ！？ご愁傷様……、みたいな視線くれやがって！
！ある意味お前の責任だかな！？ ……1割くらい……

………後でエイミィさんに、この間本局で女性の管理局員に囲まれてアタフタしてた写真わたしてやる……

せいぜい弄られろ………ちくしょう（泣）

「本当にこんな所にロストログアがあんのか？ここって偉い学者の

調べでも昔から文化レベル0なんだろう？」

うつそうと生い茂る草木を掻き分け進んでいて、ふと疑問に思ったことをクロノに聞いてみた。ロストロギアは失われた文明の遺産で、以前文明があつた形跡のありそうな世界での発見率は全体の99%だ。

「だからこそ、だ。文化レベルが以前から無い所でのロストロギア反応、学者の説が間違っているか、あるいは……」

そこまで言って言葉を止め、起動状態のS2Uで目の前を指す

「誰かしらがいる可能性だ。」

そこには明らかに気味の悪い笑顔を浮かべ、手には台座に刺さったままの神々しい剣を握った赤いコートをきた男が立っていた。

て言うか……

「笑った顔、気持ち悪い……てか、どんだけニヤケ顔……」

「言ってやるな……、さすがに可哀相だ……」

クロノも同じことを考えていたらしい。

俺やダよ！？あんなのに話しかけるのなんて……

どうする？という視線をクロノに送ると、君が話しかける。という
思念がきた！？

マジでか！？ 無理だから！？ 女の人が真正面からあのニヤケ顔
みたらトラウマになるぞ、あれ！？

えっ？上官命令？ふざけんな断れなくなっただじゃねーか！？

クロノ、覚えてろよ……、と思念を送り……俺はその男に声をかけた

「時空管理局の者です。なにをしていらっしやるのですか？」

男は驚き急にこちらを振り返ったが

汗っ！？汗飛んでるから！？

そして気味の悪い顔を歪め

「げっ！？管理局、何でこの場所に！？今からこのカリバーンを抜いて真のオリ主になり、リリなの世界でフラグ乱立させようとしてたのに！？」

えっと……………

なに……………こいつ……………

「こうなったら、このカリバーンでお前を倒してやる！！」

僕のこの剣で！！とか言っただけ引き抜こうとする男……………

……………ってまずいつ！？あれ十中八九ストロギア、つかカリバーンてアーサー王の聖剣でしょ！？使われるのは不味いつて！！？

クロノも突然のことで対処が遅れ反応できていない……………！！？

あの男が剣をぬき………

剣を……ぬき………

「なんで僕の剣が抜けないんだ!？」

キモイ男、剣抜けず………

うわっハズッ……俺だったら高層ビルの屋上から飛び降り自殺するくらい恥ずかしい……

キシヨ男も、なんでだ！？ 選ばれた僕ちんなら聖剣も抜けるはずなのに！？

とか言ってた。おいクロノ、発見してすぐに不審者発見とか報告すんな……

変態で十分だ！！ 不審者に失礼だろ！！ ……………何が違うんだ？

そんな状況の中急に男が何かに気づいたような顔をして

「そうか、他に人がいるからだめなんだ！ 選ばれた人間が武器を取るときはたいてい一人だから！」

なんかブツブツ言ってるよ……

あれっ？ かなりやばい事言ってるよな！？

「ナオト！？ 避ける！？」

クロノの言葉で反射的に体をひいた。

その直後、先ほどまで俺の体があった場所を斬撃が通り過ぎる

あつぶねえ……クロノが居なかったらやばかったな………

「大丈夫か？ナオト！？」

「なんとかな……。それよりアイツ、おそらくAAAクラスはあるかもな……」

クロノも、そのようだな。と言ってるし間違いないかもな……

それにしても、何だあのデバイス？　と言っかデバイスなのか？

男の手に握られた二対の白と黒の短剣

「……どっかで見たぞ？」

たしか友達（前世）の政義くんが騒いでた Fate なんとたらか
んたら、とか言うゲームのビジュアルブックで観たな、たしか

「干将・莫耶……中国の名剣かよ！？」

小さな声で呟き、

ある意味ロストロギアだろ。ってか、使い手の顔ってあんなんじゃない
なかったような？

「ナオト、僕に作戦がある。よく聴け……」

！？ ……確かに今の状況なら最善だろ、なら

「3 2 1でいくぜ、クロノ。」

「任せとけ。そっちもしくじるなよ。」

静かになった俺たちを見て赤いコートの男は語りだした。

「なんだい、僕の力にビビッて動けないのかい？今すぐここを去るなら心優しい僕も「ウザいんだよ、アホ！」。ぶぎゅ……！」

クロノとタイミングを合わせて男にS U 1で一撃を加える。

S U 1は俺の使っているデバイスで元は管理局始めたばかりの親父のデバイスだったのを俺が受け継いだものだ。

俺が一撃を加えた後クロノがディレイドバインドを設置した場所へぶつとばす

その結果……

「あっけなく捕まったよ、このアホ男……」

傍らでクロノが報告中、俺はこいつの見張り。

それにしても……

「この剣で何なんだろう？本当にカリバーン？てかエクスカリバー？」

「僕の剣だ！！さわるな！！」

バインドに縛られた男が叫ぶがこの剣はいずれ管理局で管理されるか、保護という名目で放置されるかだ。

ロストログアを管理するといっても時には関ってはいけないものもあるらしい。

下っ端の俺にはわかんないことだけだね。

「こうなったらこの転移装置で！！」

やべっ！？ こいつ！？ほっといたらバインド解除してら……………
俺のすっかりさん（笑）

……………じゃねえよ！？ 早く捕まえないと、こんな男を現代社会に出

したらそれこそ犯罪だ！！

「っ！？ 大人しくしろよ！！」

「僕に触るな！！」

取り押さえようとしたら、男に魔力弾でぶつ飛ばされた。

こいつっ！？ どんだけ馬鹿魔力だよ！？

剣の刺さった岩の方にぶつ飛ばされながら感じた魔力量でさっきは力を隠していたようだ。

やべっ！！ ぶつかる！？

ゆっくりと剣のほうに向かい……俺のS U 1のデバイスコアが剣の宝石にぶつかった瞬間

>マスター認証。マスターが危機的状態のため魔力の開放を開始します。
<

この言葉とともに剣が光始め、強烈な光と膨大な魔力が流れ出した。
あれっ！？俺まじいんじゃね？

明らかに次元震が起り始めている中で意識が朦朧としながら考え
ていた

「僕のカリバーンが!？」

おいしいい!？　まずは俺の心配してくんない!？そこの男!

「ナオト!？　手をつかめ!！」

クロノが手を伸ばす

さすが俺の上司!!　伸ばした手を掴……めずに落ちていく……

「手え短いんじゃボケエエエエ!？」

「君の手が短いんだろう!!って、ナオト!!！」

言い合っている最中も虚数空間に落ちていく

くそっ、こんな事言いたくねえけど……

「クロノ！！早くあの男捕まえてアースラに戻れ！！」

それとな、と笑って

「みんなによろしく。」

その言葉を最後に俺は意識を手放し、虚数空間に落ちていった。

episode 2

ゴオオオオオオ

なんださっきから……ビュービュー五月蠅い、それになんか寒い。

虚数空間の中って寒いのか？

ゆっくりと目を開けて自分の状態を確認すると

「なんか落下してるんですけどおお！？」

俺、虚数空間に落ちたはずだよな！？なんで空から地面へ向けて落下してんだ俺ええ！？

>それはマスターの魔力が足りず、私の内包魔力を使用したために術式が不安定になってしまったため次元震クラスの虚数空間を通し

ての転移をおこなったからです。＜

「そうなんですか？」

>そうなんです。＜

ってことはやっぱりあの剣はロストロギア、それもかなり危険度の高い代物だったわけか……

ああ……、またクロノに怒られそうなのがする。帰れたらだけど……

>マスター、地上まであと1000メートル切りました。＜

「よし。じゃあ飛行魔法を展開し……」

……俺、さっきから誰と会話してるんだ……？

>マスター、どうかしましたか？<

「SU1がしゃべったあああ！？」

なんで！？ SU1はストレージデバイスだったよ！？ まさか父さんのどつきり……なわけあるかあああ！！ この9年間みてきたけどここまで露骨なドッキリする人じゃねえよ！！

>早く飛行魔法を展開しないとまずいかと。のこり500メートル<

SU1？に言われて我に返り飛行魔法を展開しようとして違和感を感じた。

SU1に魔力が通りにくい！？

ストレージデバイスの特徴の処理速度の速さが若干鈍い。他の人は意識しないと感じないくらいの違和感だが、長年相棒として使用してきたナオトには感覚の手に取るようにわかった。

> のこり200メートル。落下地点付近に高魔力発生体と民間人を
1名確認。 <

つて、今は気にしてる場合じゃねえだろ!!

つか今気づいたけど魔力ほとんど残ってねえよ俺!?

しかも目を凝らしてみると民間人(俺と同年くらいの女の子)に
高魔力体(黒い物体)が襲い掛かろうとしているし!?

.....まずこの状況をどうにかするのが先だな

俺はなけなしの魔力を飛行魔法の展開に注ぎ込みそして

> A c c e l F i n <

アクセルフィンを展開するも

「展開遅かったああ!!」

ドガアアアアン！！

「にゃあああ！？なんか落ちてきたの！？」

黒い物体に突っ込みましたよ、こんちクシヨオおお！？

「うう……、あれっ？ここは？」

たしか上空からパラシュート無しのスカイダイビングして、黒いやつに直撃して……

体が痛いけど、周りは静かだ。

「そうか！ー！今までののが夢だったんだ！ー！」

たぶんクロノの訓練の時に撃墜されてからずっと寝てたんだよ（、
・（）キリ

「SUIが喋るとか……インテリジェリンスデバイスは憧れるけどさー、どんだけ己の欲望丸出しの夢だよなあ、まったく。」

どうかしましたかマスター？

「ウワーオ……」

夢じゃないんですね……

「えっ！？それじゃさっきの女の子は！？」

周りを見渡すと、公園の中のベンチに寝かされていたみたいだな
あの子がはこんでくれたのか？

「あっ、気がついたみたい」

あっ！ー！さっきの女の子！ー！

「えっと……はい、これ！ー！」

女の子は可愛らしいウサギ柄のハンカチを差し出して

「お顔が汚れてるから、これで拭いたらいいの」

「あつ、ありがとう」

なにこの子、メチャクチャ優しいんだけど!!

俺の人生（前世も込み）でも五本指に入る優しい子！

つて、あれ？

「さっきのが夢じゃないならモジャモジャの魔力体は!？」

「あれなら、彼女が封印しましたよ。」

俺の問いに答えたのは小さなイタチの様な生き物だった。つてイタチ!？

「イタチが喋った!？」

「イタチじゃない、フェレットだ!!ちゃんとユーノ・スクライアつて名前もあるんだけど。」

喋るフェレット?のユーノか……

話には聞いたことはあったけど喋る動物を見るのはじめてだな……

.....ん？

「ユーノとやら、先程言った言葉をもつかい言ってくんない。」

「イタチじゃ」

「そのまえー！」

俺の聞き間違いじゃないだろうか、いやそうだ！！そうに決まってる！！

「彼女が封印しましたよ。ですか？」

「えっ！？封印しちゃいけなかったの？」

訳がわからない様子のユーノと驚いた顔をしてる女の子。

「えっと.....、どこかの部隊で訓練とかうけたのか？」

首をかしげながら女の子は

「訓練って兵隊さんとかの？」

「彼女は魔法を使うのは初めてですよ。」

まじかよ.....

訓練をうけた武装隊の奴等でも、あの魔力体クラスの敵になるとて

こずるんだぞ！！

それを今日初めて魔法を使う子が封印しちゃったとな！？

「あなたは優しい人ランキングから削除されました。」

「よくわからないけど、すごくバカにされた気がするの……」

「それで貴方はやはり魔法が存在する世界の人ですか？」

俺の呟きから少しだけ沈黙があつてからユーノが改めて俺に聞いてきた。

「そう言えば自己紹介もしてなかったな。ナオト・ヴァンクル 9 歳、巡航船アースラに所属。一応、執務官補佐です。」

かつこよく言ってみたけど、執務官補佐にはなつたばかりで実際の現場に入ったのはこの間の事件だけだね………
つか思い出したらあの赤マントに腹がたってきた！！

「執務官補佐ですか！？良かったこれで管理局に連絡がとれますね！」

「良かったね、ユーノくん」

(。□。)

そうじゃん、クロノに連絡とらないと!!

あゝ、でも連絡とれても第一声は説教なんだろうな……
でも背に腹はかえ

マスター

「さすがに、もう驚かないからな……。……なんすか？」

私のなかに存在するメモリーには管理局という組織、その他の友人の連絡先のデータは存在しません。

………はっ？

「そんなわけ無いだろ！？冗談だよな？冗談ですよ？冗談と言ってください……」

私がマスターに冗談を言ったとしても得はありません。事実です。

なん、だと……

ズシャ

「膝から崩れ落ちたの!？」

「顔から生気がまったく感じられないんだけど!？」

「ごめん、取り乱して……………」

あんまりな状態に取り乱してしまった俺。
しょうがないでしょ!？

あるはずのアドレスが消えてんのよ!？ もうマスオさんもビツク
りだわ!？
ええー……………

「えっと、私たちも自己紹介してもいいかな？」

「あっうん。」

俺が正気に戻るまで待っててくれたのね。

「私、高町なのは　小学三年生です。家族とか仲のいい友達はないって呼ぶの」

「さっきも言っただけど、僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから。ユーノが名前です。」

女の子の方がなのはで、フェレットがユーノね。

「それなら、さっきの出来事とその経緯をおしえてくれないかな？」

なるほどね。

ユーノの部族が発見したロストロギア（ジュエルシード）を運んでいる途中に事故が起きてロストロギアがこの世界に散らばってしまった

っ
たらしい。

そのロストロギアが思念体の様なものになったものがさっきのモジヤモジヤだそうな。

ちなみにこのジュエルシードとやら、元々は生物の願いを叶えるもので、宝石のような見た目をしているとか。

「……あれか、ラゴンールの的なあれだな七個そろつと願いが叶うと……」

「ドランールが何だかわからないけど、ナオト思ってるようなものではないよ！！数も21個だし。二つは回収できたんだけど……」

「えっ違うの。ってか21個！？ロストロギアが21個だとおお！？」

どんだけ紛失してんの！？

ロストロギアは単体でも取り扱いが危険で十分に管理されないと暴走するんだぞ！？

「……………おいおい、勘弁してくれよ。」

こりゃ帰る前に大仕事しなきゃない気がするぞ。

「本当にごめんなさい……。僕のせいで……」

あつ……。しまった。俺言い過ぎたかな……

「口が悪い事と一言多いのを直せ。」

つてクロノに耳にタコが出来るほど言われてたのになあ……

「いや、俺の口が悪いのはいつもの事だからさ。ユーノごめん!!」

「うん、でもナオトやなのはさんを結果的に巻き込んでしまったし。」

と言ってうつむくユーノ。

そんなに責任を感じなくてもなあ。

俺なんて宿題が出来なかったのクロノのせいにして逃げたこともあるからね。

……結果、ばれてクロノにボコボコにされるわ、宿題増えるわで、関係ないな。うん。

つまりはユーノが一人で責任を追わなくても良いってことなんだが。

そんなこと思っていると、なのはがクスツと笑って

「えっと、たぶん、私へいき。あつ、ユーノ君もナオト君も怪我してるしここじゃ落ち着かないよね。とりあえず私の家に行きまし

よう
」

確かに落下したときの衝撃で体の節々は痛いし、治癒魔法は苦手なうえに魔力もほとんど残ってないし。なのはの家に行くのが……つて！？

「俺が行っても大丈夫なのか？」

いきなりお友達だから今日泊めて、となのはも親には言えないだろうし……

「……………ああ！？」

今気づいたのね……

「とっ取りあえず、お父さんやお母さんに聞いてみるの！！」

焦りを浮かべたのはと、どうしようと考えてるユーノ。

わりと絵になってるし。

まだまだ神様は、俺を休ませてはくれそうにないな……………

いつも休みをくれない上司の顔を浮かばせながら、俺は二人と夜の公園をなのは家に向かって歩いて行くのだった。

episode 2 (後書き)

かなり更新出来なくてすみませんでした。
いろいろ立て込んでまして。

00フリーダムさん。遅くなっすみません!!

m (m

episode 3

「よくも、なのはをこんな時間まで連れまわしてくれたな。覚悟は出来てるか？」

「ほんつとにすいませんでしたああ!!」

開口一番に土下座してます。

えっ！？　なんで土下座してんのかって？

それはだな……………

公園での会話の後、三人？でなのはの家に向かった。

「それにしても、ユーノの部族って有名なのか？」

「管理世界ではかなり有名なほうだと思うけど……。と言っかナオトはスクライアのことを知らないの、補佐官なのに。」

疑惑の目を俺に向けてくるユーノ。
ああ、そのことが

「俺ってば訓練校時代は戦うことしか考えてなかったんだわ。」

あの頃とはとにかく現場で使えるような魔法調べてばっかだったしなあ。

「それじゃ補佐官は大変なんじゃない？」

「ああ、今の上司に毎日勉強させられてるよ……………休憩時間に。」

クロノのやつ

「時間がもつたいたい。休憩時間にやるぞ。」

とか言い出すもんだから、俺の休憩時間は補佐官になってから一度もありません。

「ナオト君お疲れ様なの。」

そんな優しさが嬉しいよ、なのは。

クロノにもそのくらい優しさがあつたらよかったのに……………
ん？仕事といえは

「なのはの両親は何の仕事してんの？」

「あつ！僕も気になる？」

「うんとね、家は家族で喫茶店をしてるの。ミドリやって言っただよ。」

喫茶店かあ……………

半年近く行ってないよなあ……
仕事終わった後も帰ってベットにダイブ。
たまの休みもベットでゴロゴロ……

……………これがワークホリックってやつなのか!？
いや、休日のオッサンか……

「ついたよ。」

変なこと考えてるうちに到着してたよ。
この件を考えるのは後だな……

「えっと、静かにね。まだお父さんたちは起きてると思うけど……………」

「こんな時間まで、何処にお出かけた？」

驚いて振り向くと見た目18、9くらいのお兄さんが腕組みをして
仁王立ちしていた。

にしてもムダにイケメンじゃねえかこの兄ちゃん……

「お兄ちゃん!？」

なのはのお兄さんでしたよ。

そしてその兄ちゃんがゆっくりと俺の方を向き、疑問をもった顔で

「なのは、この男の子は誰なんだ？」

訪ねるのは良いんですが
なんだか殺気だつてませんかああああ！？

「えっと、その……。お、お友だちのナオトくんです。」

なのは、そこまでもつたら信憑性がなくなるでしょ！？
この兄ちゃん今にも俺に襲いかかろうとしてるんすけどおお！？

「よくも……」

あれなんか、嫌な予感が……

「よくもなのはをこんな時間まで連れまわしてくれたな。覚悟はできているか？」

冷静に言ってるように聞こえるだろうが、殺気はバンバン飛んできて冷や汗がとまんねえんだよおおおおおお！？

「ほんつとうにすいませんでしたあああ！！」

.....

……

……

というわけです。

そして土下座中の俺に小太刀のようなもので襲いかかろうとする、
なのはの兄ちゃんをなのはが必死に止めてる……

俺、明日まで生きてるかな……

「あっかわいい　なのははこの子のが心配で出掛けてたのかな
？」

それとも、この男の子に会いにいったのかなあ？」

いきなり現れてニヤニヤしながら話しかけた姉ちゃん、つかこの
人も綺麗な人だな。

……誰？

「お姉ちゃん！？そそそっそんなんじゃないの！？」

なのはの姉ちゃんでしたか

この兄妹スペック高いな。………そういえば家の兄貴もイケメン
だよなあ

おれっ？

普通だよ、普通。

悪くはないと思うんだが……
誰に言ってるんだ？おれ？

「まあまあ恭ちゃん。まずは中に入ってお話を聞こうか。なのはも君も良いよね？」

「はい！！それをお願いします！！」

ありがとうございます、なのはの姉ちゃん！！
正直この空気は耐えられません。

「お父さんたちも起きてるしね。」

ああ、尋問されるんですね……

どうしよう、魔法はできる限り秘密にしないし。

でも、どっちにしろクロノに怒られるよなあ……

「ナオトくん？入らないの？」

「あっうん、今行く。」

さて、どうしようかな……

episode 3 (後書き)

今年最後の投稿でした!!

短いけど……

来年もよろしくお願いします？

episode 4

なのはの家に入りました。

殺気を俺に向けて放つなのはの兄ちゃんに案内され
ある部屋のドアを開けて

「今、父さんと呼んでくるから。君は居間で待っていてくれ。」

とか言ってる間も俺への殺気は収まりません。

勘弁してください!?

俺のライフはもうゼロです!

あれっ? どこかで聞いたことがある台詞だな……

「とにかく部屋の中にどうぞ。えっとお……」

そういえば自己紹介してなかったね、俺。

「ナオトです。ナオト・ヴァンクルです。」

「ナオトくんね。私は高町みゆき、なのはのお姉ちゃんです。」

「よろしく願います。みゆきさん。」

みゆきさんに案内され部屋の中に入ると

「あら?どうしたの?みゆき、なのは。そっちの男の子は?」
女神がいた。

「一万年と二千年前から愛してましたああああ!!」

「うわっ!?! 行きなりどうしたの? ナオト君!?!」

みゆきさんがビックリしてるけど関係ないね!!

目の前の女性が女神に見えるよ。

薄い茶色のロングヘアーとか優しい雰囲気とか

美人だけど綺麗系じゃなく可愛い系に部類されることが俺のタイプは年上です!!

「ははっ。いきなり桃子を口説くとはなかなか見所があるな! でも桃子は俺の妻だからな。」

「お母さんにナオトくんが告白してるの……」

えっ……妻……お母さん!?

「そんな……ヒドイ……」
ズシャ……

「また膝から崩れ落ちたの!?!」

「よっぽどショックだったんだな。」

なのはとなのはの兄ちゃんがなんか言ってるけどわかんないわぁ……
もうどげんもならんとするでござす……

.....

.....

.....

.....

...

「さきほどは取り乱してすいませんでした……」

「落ち着いたかい？」

もちろん落ち着きましたよ。

妻、お母さん発言で冷水どころか液化窒素ぶっかけられましたし……あれから意識を取り戻して自己紹介をして、今まさに尋問をされています。

「さて、率直に聞こうか。ナオト君。なのは。どうしてこんな時間まで、いや、なのはがどうしてこんな時間に出掛けたのかききたいんだが。」

さて、どうしようかな……

話を切り出した土郎さんと桃子さんは表情からは何を考えているかはわからない、ってか読めない。

それと引き換え恭也さんとみゆきさんはこちらが嘘をつかないか、見極めようとしている。

本当にどうしようか……

正直に言つとこの世界は管理外世界で名前は地球と言つらしい。

前世の故郷に会えたのは嬉しいが大事なのは、この世界に魔法が存在しないことだ

いや……探せば出てくるかもしれないけど……

本来、管理外世界の人間、世界には、こちらの魔法を認知されるのは良いことではない。正直、自分が知らない知識など人間は信じようとはしないし、それが魔法のない世界なら頭がおかしくなつたと救急車を呼ばれてしまつだろう。

『ユーノ。どうしようかな？』

『そうだね……』

『俺としては正直に話してなのはの協力を得たいところなんだけど。』

『えっ！？どうして？』

『まず第一に……俺は封印魔法があまり上手くない、つてかロストロギアを封印するのには魔力が足りなすぎる。なのはを極力戦わせずに封印だけでも良いから手伝ってもらえると回収率も上がるしな。』

『なっなるほどー！ー！』

『二つ目は魔法を知ってしまった以上、こちら側の目の届くところ
においとかないと……。なのは場合はあいつ一人でも探し出そう
とするかもしれないし。』

『ナオトって意外と考えてるんだね。』

『ユーノ、あとで握りつぶしてやるからな。』

まっ、ユーノにも話しは通したし、協力を養成しちゃいますか。

えっと、切り出しかたはできるだけ真面目に

「土郎さん、桃子さん、恭也さん、みゆきさん。魔法ってしてま
すか？」

僕は魔法使いなんです。」

「恭也、救急車って何番だったかな？」

「親父、警察の方がよくないか？」

言ってたことが現実になりかけてますねえ……
でも真面目に話して協力を得ないとな。

「本当に魔法使いなんです。その証拠に、ほら。」

魔力球をだして高町家の面々の周りを不規則に飛ばしてみる。宙に
浮きながら。

「これは驚いたな！？」

「本当に魔法使いなのねえ。」

「これを見せられたら信じるしかないだろう。」

「わぁ、速いなあ。この光!!」

「魔法ってこんなこともできるんだあ!!」

受けは上々のようだけど話を続けなきゃな

「これで僕が魔法使いだって言うのは信じてもらえましたか？」

「空中に浮いたまま、不思議な光を飛ばせば信じるしかないな。」

ありがとうございます。土郎さん。

「でも君が魔法使いなのと、なのはが夜遅くに家を飛び出したのは関係があるのか？」

恭也さんは鋭いな。関係が有るってことに気がついていて遠回しに聞いてくる。

俺より執務官の才能有るんじゃないね？

「なのは？どうして家を飛び出していったの？」

「あのね、お姉ちゃん。声が聴こえたの。」

魔力のない一般人には聞こえないんだって……
それじゃ説明にならないから!!

「声だって……？」

なのは意外の高町家の面々は訳がわからない。って顔してんだよね
あ。

んでもなのはが家を飛び出した理由は俺は詳しくはわからないし……

「それは僕から説明します。」

ナイスだユーノ。

俺のわからないところを皆に説明してくれ!!

なるほど。

要するに

ユーノがピンチになる

誰か助けて〜（思念）

なのは「私にまかせろ!!」

ってことかな。

えっ？はしよりすぎ？

つまりはなのはがユーノの思念を聞いていてもたってもいられなくなつて助けに来たつてことだよ。

まあ、高町家の皆さんに協力してくれ!!

つて言うのは俺なんだろ。

さっきの話でなかったから

「よくわかった。ナオト君、まだなにか言いたいようだがなにかない?」

鋭すぎです、土郎さん。

「ええ、本題に入ります。なのはさんにロストログアの回収を手伝つていただきたいんです。」

「家のなのはに手伝えることがあるのかい?」
土郎さん。娘が心配なのはわかりますが……

もおおすこし威圧するの抑えてもらつていただきたいんですけどお
おお!?

なにこの人のオーラ!?

絶対、裏の仕事してた経験あるでしょ土郎さん!?

「土郎さん。あんまりプレッシャーかけちゃダメですよ。」

「桃子!?! すつすまん?」

桃子さん……

綺麗な笑顔の後ろに鬼がみえました……

とりあえず土郎さんの質問に答えるか……

「十分すぎるくらい戦力になります。先ほどユーノが話した内容に
関係があるのですが。」

「願いを叶える石、ジュエルシードだったっけ？
その石に関係してくるのかな？」

みゆきさんが話の内容を思い出しながら聞いてきてるけど
恭也さんも頷いてる。

本当にこの家の人達は官が鋭いねえ……

「ふえ！？ なつなに？ ナオトくん。」

なのははダメだけどな。

「はい、みゆきさんが言ったようにジュエルシード。僕たちの世界
ではそれらの様なものを総括してロストロギアと呼んでいます。」

なのはがなにか感づいて

「今、すごくバカにされたのお！？」

とか言ってるが。

何でこんなとこだけ勘が冴えてるんだよ……

無視だ、無視。

「ジュエルシードが暴走した場合に再度封印をかけなくてはならな
いんですが……

俺の場合、魔力の絶対数が足りてないんですよ。」

そうなのよねえ……

俺の魔力ランクはギリギリA。

さらに封印魔法に適正がないから使えることには使えるんだが、さ
すがにロストロギアを封印するのはほぼ不可能に近い。

「なのはさんの魔力はこちらの世界でも全体で5%しかない、おそらくAAクラス以上だと思います。」

なのはから感じる魔力量は低く見積もってもAA以上はある。

しかもユーノの助けがあったからといって

始めてで、しかも一人で暴走体を封印したと言うことは確実に魔法を扱うセンスも持っている……。

「なのは。そして高町家の皆さん、俺たちに協力してください。」

これでダメなら俺とユーノだけで探さなきゃならないから絶対過労死するわ……

「なのは。なのはの考えを聞かせてくれるか？」

「……私は、まだわかんない。」

うつむいたまま土郎さんの問いに答えるかなのは。

さっきの話を聞けば迷うのも当然か……

「……でも私に何か出来るならナオトくんやユーノくんを助けてあげたい。」

「そうか。」

なのはの答えを聞いたあと土郎さんは俺らの方を向いて

「なのはの意志が君たちの助けになりたいと言っているなら俺は止めたりはしない。」

土郎さん……………

かけえええ!!

俺もこんなナイスミドルになりたいっすよ!!

「ただ一つ聞きたいんだが、私たちは協力出来ないのかな?」

「バックアップくらいにしかならないと思います。」

「ちょっと!? ナオト!?!」

「ユーノ。事実だろう。」

「俺らじゃ力不足だと言うのか?」

「はい。恭也さん達が一般の人たちを越えているのはわかります。でもその力はジュエルシードには通用しないです。」

「そうか……。ならなのはや君達を補助させてもらうよ。出来れば力になりたいんだがな。」

本当に良い人達だな。
優しい人達なんだ。

「恭也さん。その気持ちだけで十分です。」

.....

.....

.....

...

「じゃあこの話はおしまい。みんなお腹空かない？

お母さん張りきって作っちゃうから」

「おいおい桃子。夕飯は食べたんだから程々にな。ナオトくんやユノくんも食べていくかい？」

「いただきます!!」

「僕もご馳走になります」

桃子さんのご飯が食べられるなんて.....

.....あれ？

ご飯で思い出したけど俺とユノって何処に住めば良いの？

「?どうしたの?ナオト君?」

「なっなんでもないですよ、みゆきさん。」

とりあえず桃子さんのご飯をいただくのが先だな

住むようにして……

episode 4 (後書き)

唐突ですがアンケートです。

ナオトのレアスキルを投票で決めてもらいたいと思います!!

この中から「これ使ってくれや。」的なを選んで感想に書き込んでください!

?ペルソナの召還

?THE サード BirthdayのアヤブレアのOD オーバータイプ

?相手の魔法を数回だけはねかえすバリア (技名はあとで考えます。
)

この中から選んでください
締め切りは1月31日までで?

んでは皆さんノシ

episode 5

.....さて。

皆さん。

おはようございます。

こんにちは。

こんばんは。

今から寝る人にはおやすみなさい。

私、ナオト・ヴァンクル

九歳

ちなみに独身よろしくね

って何処かの極道な先生の様に自己紹介しないと今の状況に心が負
けそうなんです.....

なぜかって？

それは.....

「なのはさあああん!？」

早く起動して封印してくれないいい!？」

「ガルル!!ガルガルル!!」

ただいま目が沢山ある犬らしきモノに食われそうだからです!？」

「あんなに長い言葉覚えてないよお!？」

「クソ役たないじゃねえかよ!？」

誰か助けてええ!!

Help meeeeeee!

リリカル転生記

時間は少し遡ってユーノやなのはと顔をあわせた次の日の朝

なし崩し的に高町家に住むことになりました。

簡単に言ってしまうえばそれまでだが……

省略して話すと

ご飯を食べた後に俺とユーノが住む場所がないって事を高町家の皆さんに話したら

「あら！？ならナオト君の上司さんが来るまで家に居候する？」

と、桃子さんが提案してくれて

「良いじゃないか。ナオト君、ユーノ君そうしなさい！」
などと士郎さんが乗っかって来てしまいました。

ちなみに恭也さんやみゆきさんも頷いてたし……

んでもって次の日。

朝ごはんを高町家の皆さんと食べて

士郎さんと桃子さんはお仕事の喫茶店へ

恭也さん、みゆきさん、なのははそれぞれの学校へ向かいました。

……俺っ！？

オレとユーノはお留守番ですよ

一応昨日の怪我也治ってないですし。

『なっナオトくん。聞こえる？』

まあなのはには昨日の説明の他に細かい所まで確認するために

『大丈夫。聴こえてるから。ユーノも聴こえてるか？』

『こっちも大丈夫だよ。』

思念は使ってるんですがね。

……………それにしても

『……………で、ジュエルシードは単体でも危険なんだ。』

『そうなんだ。』

なのはって魔法と出会ってまだ二日も経ってないよな……………
なんで普通に思念返せんだよ……………

魔法の才能ありすぎじゃね……………

「ナオト。説明終わったけど。」

っと、ユーノがこれからどうする？と聞いてきたので

「午前中は大事をとるために体を休めて午後からこの辺の地理の確認もかねてジュエルシードを探す。こんなところで良い？」

「そうだね。まずは体を休めようよ。」

それじゃ午後まで寝ましようかね！！

ヒイヒイヒイン

「ナオト！？」

うん、寝てても目が覚めるほどの魔力のうねりだね……

十中八九ジュエルシードが発動したんだろうねえ……

にしても昨日の今日で頻繁に発動しすぎだろ

この町……呪われているんだろうか……

「とりあえずなのはに連絡とって。俺たちは発動場所に向かうぞ。」

「これはまた……」

「すごいね……現住生物を取り込んでる。実態がある分、昨日の奴より数段強いよ……」

ジュエルシードが発動した場所に向かうと倒れてる女の人と明らかに犬ではないが犬らしき目がたくさんある生き物が唸っていました

……

「ナオトくん、ユーノくん……ってなにあれ!？」

なのはも到着してすぐに暴走体に気づいて驚いてるけど、何って聞かれたら

「犬っぽいもの。目がたくさんあるけど。」

「確かにたくさんある……」

「って、そんなこと言うてる場合じゃないの!?!早く封印しないと!」

「!もつともだ!」

さてと……

「ユーノ。弱らせて封印まで持つてけばいいんだよなあ。」

つかそれ以外だと俺あんまり役に立たないかも

「そうだね。動きを止めてる所を封印するから……ナオト、お願いできる？」

「りょーかいだー!!」

>マスター。セットアップしますか？<

「あつ、お願いします。」

良し行くか

「S U 1、s e t u p」

いつもどりの機動隊の様なバリアジャケットだ。
起動には問題ないみたいだな。

「ナオトのデバイスは拳銃型なんだ。ミドルレンジ専門なのかな？」

そうそう、俺の愛機S U 1は拳銃が……たの……

「なんじゃこりやあああああ！？」

> どうかれましたか？<

なんで！？ S U 1はごく一般的な杖型のストレージデバイスだぞ
！？

なんでギラギラした拳銃型のデバイスになってんのおおおお！？

「ナオトくん！？ 怪獣が！？」

え？

怪獣が……なに？

ガルルルウウ！！

「襲ってきてる……」

「早く言えよ！？」

暴走体が飛び掛かってきて咄嗟にプロテクションを張て罅迫り合い
みたくなってるけど

体制が俺が下で暴走体が上。

早くしないと押しきられる！！

つかこの際S U 1が杖型から拳銃型になってんのは気にしねえ！！
それよりも

「なのはさああん！？早く起動して封印してくんなああああい！？」

動きが止まってる今なら封印できるから！！
ちやつちやつと封印しろよ！？

「えっえっと……どうやって起動するの？」

「はああああ！？」

「なのは、こないだ言った起動パスワードだよ！？ほら『我、使命を……』から始まるパスワード！！」

「あんな長い覚えてないよぉ」

「クソ役に立たないじゃねえか！！」

ああ、不味い……
疲れてきた……

「ナオト！？」

「ナオトくん！？」

ナオトくんを助けなきゃ!?
でもどうやって……

>master、please call my name <
レイジングハート!?

>master、please call my name <

わかったよレイジングハート!!

「レイジングハート、セットアップ!」

>ok stand by ready set up<

「!?! 起動パスワード無しで!?!」

「ありえねえ……」

私を包んでいた光が消えると昨日と同じ服装に魔法の杖を左手に握っていた

「ありがとう レイジングハート」

> please don't worry <

よし、ナオトくんを助けるためにも早く封印しなきゃ！！

.....

.....

.....

...

なのはの奴、起動パスワード無しでデバイスを起動させやがった！？

マジかよ.....

そのパスワード無しの起動に行くには訓練をうけるか、インテリジ
エンスデバイスならデバイスとのシンクロ率が高いかしらないんだ
が.....

多分、後者なんだろう、って暴走体の攻撃が厳しくなってきたやがった

!?

「なのはあああ!?!早く封印してくれ!」

「うん、レイジングハート。」

> selling mode set up <

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル??. 封印!」

.....

.....

.....

...

ふいふ(´・`・、)

なんとか封印して回収したけどヤバかったな.....

>そうですね。マスター役たたずでしたもんね。<

「八割がたお前のせいですけどねええ!?!」

「ナオト、落ち着きなよ。」

ああ悪いなユーノ……
それにしたって

「なんで拳銃になつてんの？お前。」
>私のプログラムに多少なりとも変化があつたのか。起動を開始して完了したらこの形になっていました。<

「お前もわかんないのかよ……」

はあああ……
八方塞がりじゃねえかよお……

「とつとにかく！！三つ目も封印出来たんだし、ナオトも元気だしなよ。後で一緒にメンテナンスしてみようよ。」

「そうだな……」

ユーノはデバイスのメンテナンスも出来るのか。
助かるわぁ。俺のメンテナンスは汚れとったりとか細かいプログラムの調整くらいしか出来ないしな。

「じゃあ家に帰ろう ナオトくん、ユーノくん。」

「そうだな……」

報告書

とりあえず、二度目の封印も色々あったが無事に封印を完了。
SU1がなぜ拳銃型に変化していたかはいまだ不明。
現地協力者、高町なのはの魔法の才能は異常だと思う……

こんなところだろ。

はあああ……

たった2日しか経ってないのに二つもロストログアが発動してるし。
海でもありえねえだろ……

「ナオトくん。ご飯だつてえ」

「あいよお。いまいく」

まあこの町の人たちはみんないい人そうだし

「できる限りのことはやりますかねー!!」

>私も手伝いますよ、マスター。<

「頼むぜ、SU1。」

「ナオトくん!」

「今いくつの!」

まずは桃子さんのウマウマご飯だな

.....

.....

.....

...

この時、神社での出来事を誰かに見られてたなんて、俺は気づいて
いなかったんです.....

episode 5 (後書き)

アンケートの投稿ありがとうございました。

また何かしらあったら、皆さんヨロシクお願いします

episode 6 前（前書き）

感想くださると嬉しいです

episode 6 前

.....

.....

.....

...

高町なのはは魔法少女である。

しかし彼女にも一般人の生活あり、今は自身が通う聖祥大付属小学校でいつもの三人組でお昼ご飯を食べている最中だった。

「なのは！聞いているなのは！！」

「うん。聞こえてるよ。アリサちゃん。」

ぼうつとしている様に見えたのかアリサ・バニングスがなのはに少し強めの口調で聞き

それになのはは”そんなに大きな声出さなくてもなあ”と心の中で思いながらも口にはせず”明日の予定でしょ。”と確認するとそれに満足したのかアリサは言葉を続け

「そうよ。明日のサッカーの試合を見に行く話なんだけど、現地に直接集合ね。すずかもそれでいい？」

「うん。私もそれでいいよ。」

アリサの言葉に最後の一人の月村すずかが返した。
アリサが言っている試合とは高町士郎が監督するサッカーチームの練習試合である。

明日行われるサッカーチームの練習試合になのは達三人組が招待され、”応援してくれないか。”と士郎からお願いされたのでそれならばとその時の予定をアリサが立て、内容の確認をしていた。
そんな中その三人組に話しかける影があった

「なのは、アリサ、すずか、明日の試合見に来るんだろ！俺お前らのためにがんばるから俺を応援してくれよ。」

「あつうん。がんばってね。新一くん。」

彼の名前は大崎新一。

なのは達のクラスメイトである。

なのはは”新一くんがいるからいかなかな”と心の中で毒をついているのだがそんなこと口にできるはずもなく

「それじゃ！またな！」

「はいはい。」

「それじゃあね。」

新一が屋上からいなくなるとなのはが大きいため息を吐いて

「はあ……」

「なのは大変ね。あいつから話しかけられるなんて。」

「ははは、悪い人ではないんだけどね。」

「すずか。あいつがいないんだから正直言っていいのよ！！気持ち悪いと！！」

その言葉になのはとすずかはさすがに苦笑いだったが思い当たるところが新一には沢山あるので反論はしなかった

「そもそも新一君は今の言葉、いろんな女の子に言ってたよ。」

「その時点でありえないわよね……。顔は悪いわけではないのにね。」

「すずかとアリサの会話を聞きながらなのは」それ以前に生理的に受け付けないんだよねえ……」と考える。

「まあ、あいつの話はやめましょう。ご飯がまずくなるわ！！」

その言葉にまた二人は苦笑いしかできなかった。

「そうだ！こないだのフェレット、ユーノだっけ？今日、なののは家に見に行きたいんだけど。」

「あつ！そうだね。初めて見つけたときから会ってないもんね。」

「いいよ！！今日家に……！？」

「言いかけたときになのはは気づいた。」アリサちゃんとすずかちや

んを家につれて来ていいのかな？”と

以前なら”来ていいよ。”とすぐに返していたのだが現在家にはナオトがいるのだ。

ユーノは良い。家で飼うと以前言っていたから。だがナオトだ。

ナオトがただの居候なら喜んで紹介するのだが、なにぶん魔法という未知をつかう人間なので簡単にあわせて良いのかとなのはは迷った。

”あとでナオトくん達に確認とってみよう。”

「あつと、今日は駄目なんだ……。ごめんね。」

「なんか用事でもあるの？」

「うつつん。」

「そつか。じゃあまた今度だね。」

心の中でアリサたちに謝罪をしながら言葉を返す。

「あつ！？昼休み終わりそうよ！？急いで食べちゃいましょ！」

アリサの声で三人は残りのお弁当を食べ始めた。

”そういえばナオトくん達って何してるんだろっ？”

そんな疑問がなのはに浮いてきた昼時だった。

.....

.....

.....

：

なのは達に声をかけた。

これでまた俺の勇士をあいっらに見せ付けてハーレムを形成していくんだぜ。

俺、大崎新一は転生者だ。

前世はテンプレのごとくトラックにひかれて髭生やした爺さんの神様に

「なのはの世界に転生させてあげる。一個能力あげるし。」

とか言われて能力は英霊エミヤの無限の剣聖も貰ったしww

魔力もこの時点でAAAあるしいww

正直楽勝じゃね。とか思ってたんだが……

神社のときから介入しようとして（ユーノの時は寝てて気づかなかった）向かったら……

誰かもう介入していやがった！！

顔は見えなかったがあの場面に男のキャラは居なかったし100%

転生者だ！！

次にあつたらいや

「ハーレムの邪魔するなら……やってやるか？」

とりあえず会ってみてからだな。正直チートな俺なら楽勝でしょw

www

” また大崎なんか言ってるわ ”

” 気持ち悪いよね。顔はまあまあなのにねえ ”

” ああ言うのを『残念なイケメン』て言うのよね。 ”

おっと！女の子達がこっちをみてなんか言ってるぜ。

きつと俺のことが好きなんだなww
とりあえず笑顔と手を振つとくか
ニコニコwwふりふり

”イヤー!?”

” やっぱり気持ち悪い!?”

” ギャー ”

キヤーキヤー言いながらいつちやた。

照れなくてもいいのにww

よし、もう少しでフェイトちゃんも出てくるし、早めになのは達を
攻略しないとな!!

.....

.....

.....

...

なんか.....、なのはにバカにされた気が.....
まっいいや。

「いらつしゃいませえ!」

あつ!今俺が何をしているかというと

「あらあ、高町さん。新しいバイトの子は小さいのねえ。」

「ははっ、ナオト君は家にホームステイしている子ですよ。」

ミドリヤでお手伝い中ですよ。

いやあ、さすがに何もせずにお家にやっかいになるのはさすがの俺としても悪いなあとか感じるわけですよ。

んで、そのことを土郎さん達に話したら”ならミドリヤを手伝ってくれないかな”と言われれば手伝いますよね、ふっつ。

一応前世でも喫茶店のバイトは経験したことがあったのでそれが生きているようですけど

「じゃあナオト君のおすすめいただこうかしらあ。」

「あっそれでしたら……」

カランコロン

常連の尾島さんに俺のおすすめを提供して今入ってきたお客さんに

”いらっしやいませえ”とお決まりの台詞を言い席まで案内して

カランコロン

「いらっしやいませえ」

すごく混んでますね……

接客大変だ。

お店が一段落してから士郎さんがそういえばと

「ナオト君、明日なんだがサッカーの試合に出てくれないかな？つとサッカーは知っているかな。」

と言ってきました。

サッカーですか知っていると聞かれば

「知っていますよ。でもその試合に俺なんか出ても良いんですか？」

「ああ。人数は足りてるんだがディフェンスの子が一人足りないんだ。皆点数に絡むところをやりたがるからね……。」

まあ小学生くらいだとフォワードやミッドフィルダーやりたがりますよね。

カッコヨク見えるのはやっぱりその辺だからね。
断る理由もないし

「わかりました。参加させてもらいます。」

「ありがとう。じゃあ店が終わったらユニフォームとか予定を確認するから。」

カランコロン

おっと、第二陣が始まりましたね。

「じゃあ後で。」

「はい。っと、いらっしやいませ。喫茶ミドリヤへようこそ。」

さてと、お仕事を再開しますかね。

.....

.....

.....

...

次の日になってさて、来ましたよ河川敷グラウンド。

え！？昨日の夜は何があったって？

とりあえず今日のジュエルシード探索は休みにして。

なんか、なのはが”友達を連れてきて紹介して良いの？”

と聞いてきたので”いいんじゃないね。一応高町家にホームステイして
ることになってるし”

と返したのに

”きいてないよぉ！！” ”言っていないもん。”

と一悶着して、ユーノが俺らを止めたくらいだから。

よし。解説中にアップ終了！！

アップを済ませて土郎さんのところへ集合したらどうやら話がある
らしい

試合前のミーティングと俺の紹介だろうねえ.....

「みんな聞いてくれ！今日の練習試合からチームに参加するナオト・ヴァンクル君だ。ポジションはディフェンダーで今日の試合でも出場してもらっから皆仲良くな！」

士郎さんが俺の紹介を終え、周りの子達が”よろしく”とか”今日は勝とうぜ！！”とか言ってくれて歓迎ムードの中一人納得の言っていない顔の男の子が士郎さんに質問した

「士郎さん、そいつ士郎さんの知り合いですか？」

「そつだよ大崎君。彼は家にホームステイ中なんだ。それでサッカー経験があるらしいから参加してもらったんだよ。」

質問した大崎？つて奴が士郎さんの答えを聞いた瞬間顔を歪めて俺を睨んできた。

ええ！？俺なんか君にしたか！？

なんか”いや……やっぱ……こいつ……転……者……なら……やらな……”とかブツブツ言ってるし

こわっ！？　なんか家の兄貴を連想させるぞこいつ！？

「えつとき、俺に何か用？」

とりあえずなんとかコミュニケーションがとれるか確認してみるのが一番だろ。

「くっそ……する。な……の……居候なんてっら……ん……ぎる。」

うん。駄目だコイツ。ほつとこつ。

「さあ、相手の準備もできたみたいだから試合を始めろ。みんな並べ。」

試合開始するみたいですねえ。まあ来たボールをとって味方に渡しとけば大丈夫だろ。

とか考えてるとなんか女の子達の叫ぶ声が聞こえた

「あんたたち！！応援するんだから絶対勝ちなさいよぉ！！」

「がんばってえ！」

金髪と濃い青色の髪の子が応援していた。
誰かの知り合いかな

「アリサあ！すずかあ！俺のために応援ありがとう。」

ありや、さっきの大崎君の知り合いじゃねえか。

まあ言動がアホの子でも顔はかつこいい部類だからもてるのかな。

「新一以外がんばれえ！！」

「怪我しないようにね！！新一君以外。」

「二人ともツンデレだなあww」

ええええ！？今のどう考えても好意の裏返しじゃねえだろおお！？
周りの奴らも

”でたよ、新一の勘違い。”

”サッカーはある程度上手くても友達になりたくない理由はこれだよなあ”

とか言ってるのに気づかねえとか……………
惨め過ぎる……………

Piiiiiiiiiiii!!

とかやってるうちに試合始まっちゃったじゃねえかよ!?
あああああああ!?

とりあえず「後」につづくうううう!!……!?

episode 6 前（後書き）

完成しきれなかった……

早く金髪ツインテ天然の子を出したい……。

あつ感想くださると小説の更新が早くなります（ - ）キラリ

モチベーションがあがるんですね!!

今まで感想くれてた方々も引き続きヨロシクお願いします!!

episode 6 後（前書き）

感想が力に変わります。

被災地の宮城県民、そして私に力を！！

episode 6 後

さて。試合はというと前半終わって0対0のままハーフタイム中です。

試合内容はこちらがかなり不利。支配率30もいってないと思う。こんな試合になってる原因はというと……

「まったく。みんなして俺の足を引っ張って……。後半は俺にボール集めろよ。」

大崎の野郎です。

こいつボールをとると自分だけで攻めようとして駆け上がっていくんですよ、ミッドフィルダーなのに。

いやね、攻めてダメな訳じゃないんですが……

こいつが抜けたところに人を裂く余裕がないんですよ。

ぶつちやけ前半で一人退場をくらってて10人で試合してるんで、でもね……

大崎が一人で持っていった決めてくるなら俺も何も言いませんよ、ええ言いませんとも。

ただどこいつ、あろうことかボールとられてカウンターくらうんですよ!?

うちのチームのキーパーがかなりナイスセーブを繰り返したから点数にならなかったんだけど。

「大崎くん。ポジション交代だ。」

ほら見かねて士郎さんが交代させたみたいだし。
確かに小学生の中では運動神経ある方みたいだけどチームの輪を乱したら本末転倒だしな。

「ナオトくん。ミッドフィルダー出来るかな？」

「はいいいいい！？」

何でオレ！？他にも出来そうな奴いっぱいいるじゃないですか！？
いや！？周りの奴等も

”確かにナオトなら”

みたいな反応しないでええええ！？
ぶっちゃけオレなんもしてないから！？

「なにいつてんだ？お前がいなきゃキーパーのナイスセーブもなかっただろ。」

「いや、忠和。買い被りすぎだから……」

試合中に仲良くなった風間忠和にオレは言う。
全くなにいつてんだ！？

「忠和くんの言う通り。ナオトくんは敵の動きを見てシュートコースを潰してる。ナオトくん、実は経験者だろう？」

士郎さん！？

確かに相手がシュート打ちそうな場所に足出したりはしましたがけど……

「ちょっと待った！！俺以上にミッドフィルダー出来る奴なんてこ

のチームにいないし、なおかつコイツにはやらせたくねえ!!」

うん、少し黙ろうか、大崎くん。

「わかりました。やります。」

「何かつてに決めてんだ!!」

俺が了承したのを聞いたとたんに大崎が怒鳴るような声で俺に詰め寄って来た。

声デカイから!?!耳がキーンてなったから!?

「大崎くん。ポジションを下げるだけで良いんだ。もし、それが嫌なら交代しかない。」

「うつ!?!」

おお!?!土郎さんの凄みのきいた声で言われて大崎もビビっちまったみたいだな。

「さて。もう試合も再開するから気合い入れて勝ちにいこう!!後半頑張るぞ!!」

”おお!!”と皆で声を出しフィールドへ向かつ……おうとしたときに大崎から俺に声がかかる。

「お前。ミスしろ。」

はっ?何言ってるのコイツ?

「お前がミスすれば俺がまたミッドフィルダーに戻るからな。」

……小学生でこの考え方……救いようがないな。
答えは決まってる。

「精神科にでも行きな。頭の中腐ってるよ。」

「っ！？なんだと、俺の言うことが」

「きけるわけねえだろ。黙って後ろやってろ。」

はいはい、後ろでギヤーギヤー言ってるけどシカトシカトっとなん？忠和どうした？

「大変だな、お前……。」

ならかわれ。え？”メンドイからヤダ。”
だよね。

「それより。後半たのむぞ！！俺にシュートチャンスくらい作ってくれよ。」

おお。良い笑顔！！

女の子とかだったら”キュン。はっこれが恋！？”とかになりそうな笑顔だねえ。イケメンになって女の子泣かせになりそうだな……こいつ。
まあでも。

「はっ！！チャンスドロコハットトリック決めさせたるわー！！」

「なんなら、お前がきめちまえ。」

忠和。良い奴過ぎんだろ！？

「忠和の言うとおりじゃ。ナオトがきめちゃれー！」

「玄間……いつの間に……」

こいつは玄間圭介。

玄間もさっき仲良くなった一人だ。

「つか今まで何処に居たんだよ……」

「寝とつた！」

忠和の質問に簡単に答える玄間。ちなみにポジションはミッドフィールダーな。

「大崎の野郎。ワシへのパスもカットして自分で攻めちゃうから前半はヒマでヒマでしょうがなかったんじゃ。ナオト。ワシにもまわせよー！」

「はいはい。まかせとけ。」

”俺らにもまわせよー！”

”後ろはまかせとけ。”

”ぜってえ勝とうぜー！”

皆やる気十分だし、さて後半戦。始めようかねー！！

.....

.....

.....

...

.....のは！！な.....は！！

だれかが私を呼んでる。だれだろう。

「なのは！！もう起きないと」

そうだった今日はアリサちゃんとすずかちゃんとお父さんのチームの応援にいきなきy.....

「ユーノくん.....もしかして.....」

「ナオトからの思念で前半終わりそうだって。.....遅刻だね。」

わああああ！！？

どうしよう！！？

それもこれも昨日ナオトちゃんと遊戯王やって夜更かししちゃったせ

いの！
だってナオトくん……

昨夜の高町家

『私の勝ちだね！！ブルーアイズでダイレクトアタック！！』

『魔法の筒発動』
マジックシリンダー

『うわーん！？また負けたのおお！？』

『はっはっはあ！！俺に単純ビートダウンで勝とうなんて百年早いわあ！！』

『20戦全勝。なんでナオトはこんなに詳しいのさ……』

つてことがあったの。

私のブルーアイズが負けるなんてあり得ないの！！
次こそわあ。

「なのは！！急がないと！？」
！？

とにかく今はグラウンドにいかないと！！

「すぐしたくするから!!」

急がないと試合終わっちゃう。

.....

.....

.....

...

「ほら!!パスパス!!俺にまわせよ!!」

うっさいわ!!

ディフェンダーにわざわざパスまわすわけねーだろ!?

相変わらず大崎が騒いでいるが後半戦も終盤に差し掛かって以前0対0のまま。なんとかシュートチャンスまではいくんだけど相手チームの固い守りに阻まれてる。

「ナオト!!こっちだ!!」

忠和!!いいポジションにいるじゃないか!!
こっちは!!

「忠和！！パス！！」

「よし！！大崎あがれ。そして俺の五メートル後ろにつけ。」

「はっはっはあ！！やっぱ俺の力が必要だろ！！」

ちよっ！？忠和大崎上がらせたら！！

「ナオトもこい！！」

はいい！？

「いいから！！」

そう言っで忠和は走り出して相手をかわして行く。

大崎はキチンと五メートル後ろについてるし。

「なんだかわかんないけど、とりあえず信じるからな忠和！！」

快調に相手ディフェンダーをかわしていた忠和だかついに囲まれた
！？

「大崎！！」

そう言っで大崎に向かって

「ほら、よ！！」

とてつもないボールを大崎の

「よっしゃ、まかせ、うぺっ!？」

顔面にぶつけた……

「なにしとんじゃ……忠和。」

玄間、俺も同じこと思った

そして大崎の顔面に当たったボールが

「マジかよ……」

俺の前にワンバウンドした。

「ふっ。狙い通り!!! ナオト打て!!!」

確かに忠和と大崎にディフェンダーが集まって今ならフリーだ。
つか、これ狙ってた忠和のセンス半端じゃないか!?

「させるか!」

ヤベ!?

相手のディフェンダーが一人来ちまった!?

ソイツのスライディングがボールの下をとらえて高く上がっちゃまった!
た!?

でもこの高さなら!!

「忠和が作ったチャンスを!!!」

俺は高く飛び上がって

「逃せるわけねえだろうがああああ!!」

ボールを蹴りぬいた。

そのボールは相手のキーパーの指をかすめて

P i i i i i i i i i ! !

P i , P i , P i i i i !

「つしゃあ!!」

ゴールに突き刺さった。

それと同時に試合終了の合図。

「みんな!! 決めたz……なに、みんなしてポカンとして。」

ゴール決めたのにチームのみんな、土郎さんや応援に来た女の子たち……知らぬ間になのはも来てるし。

まあなのはも含めて皆ポカンとした表情をしてる。

そんな中で玄間が口を開いて

「ナオト、なんでオーバーヘッドキックできるんじゃ……決めろとは思っちよるがまさか大技で決めるとは……」

へ?

オーバーヘッドキック?

..... (。 ;)

確かに体勢崩れて飛んだから無理やりボール蹴りぬいたけど、まさかオーバーヘッドになってるとは!?

「やっぱりお前最高だわ」

忠和もかなり機嫌良さげだし (。 ;)

「両チーム整列!!早くしなさい!!」

「とつとりあえず並ぼうぜ皆!!」

みどりやFCでの俺の初練習試合は俺もビックリの大技で終わっちゃったのだった。

.....

.....

.....

...

さて。

試合も終わり土郎さんの奢りでミドリヤで祝勝会が行われているのだが.....

「いやあ、ただ者ではないっと思っちゃったがまさか試合を決める

ゴールをオーバーヘッドで決めちようとは、やっぱりナオトは面白いのぉ」

「いや、だから偶然だって玄間……」

「それにしても出来すぎなくらい完璧なオーバーヘッドだったぜ。まさにキャプテンつば」

「それ以上は言わないでおこうか忠和!!」

仲良くなった二人に絡まれています。

ぶっちゃけ酔ってんじゃねえコイツら!?

「つか皆して頭たたいてくな、ごらあ!!」

いやチーム全員……一人を抜いて絡まれています。いわく

”イギリスでもサッカーやってんだろ?”とか

”今度俺にサッカー教えるよ!”とか

”ねえ、今どんな気持ち? ねえねえ、どんな気持ち?”とか
最後の奴はグーパンで沈めましたが……
ちなみに絡んでこない一人は

「いやあ、俺の活躍どうだった? 三人とも?」

「あいつまた女の子たちに絡んでるよ……」

「救いようのないやつじゃな……」

大崎……

女の子たち明らかに嫌がってんだろぅが……
なぜ気づかないんだよ……

「よし、助けに行くか……ナオトが。」

「なんでオレ!?!」

嫌だよ

あいつウザいし気持ち悪いし最悪なんだけど……
忠和、無視ですか……

「皆そんな気持ちなんじゃ。」

「なんで心の声がわかったんだよ、玄間!?!」

「とにかく行け。俺はゴメンだ。」

忠和!?!自分が嫌だからって人に押し付けやがったな!?!

「マジでいくの?」

皆でウンウンて頷いてるしさあ。

今日会ったばかりの俺に対する態度キツくない……

「果てしなく行きたくないが、行ってきました。ええ、行ってきましたとも!?!」

俺が動き出すのを皆して合掌して見送りやがって……

『ナオト、この男の子早くなんとかして！？僕のこと握りつぶすう
！？』

「大崎テメエ、ユーノ握ってんじゃねえごらあ！！」

大崎の奴、なのは達に見えないようにユーノを握りつぶそうとして
やがった！？

「あつ、あんたゴール決めてたやつよね。」

「最後にスゴイシュートしてた人だよ。アリサちゃん。」

「あん？なにかようかい？金髪美少女。蒼髪美少女。」

大崎からユーノをぶんどって大丈夫かと確認してたらなのはと一緒に
応援してた女の子たちが話しかけてきた。まあ言葉の通り二人と
も可愛い訳だが……

「びしょっ！？……お世辞がうまいわね……。あんた、なのはの家
にホームステイしてるんでしょ？」

「そうだよ。ナオト・ヴァンクル、9歳。イギリスから来ました。
よろしく頼むね……。お二人ともお名前は？」

「あたしはアリサ・バニングス。なのはと同級生よ。」

「私は月村すずか。私もなのはちゃんと同級生だよ。」

金髪がアリサで蒼髪がすずかね。

「てゆうか、ナオトはサッカーうまいのね。あたしテレビでしかあんなシュート見たことなかったから体が震えたわ!!」

「アリサちゃんの言う通りですごくかったよ!!私、感動しちゃった!!」

「いや、あれ偶然なんですけど……」

こちらの皆様も勘違いしてますね……
あんなん狙ってうてるわけないでしょ……
……で。

「なのはさん何をそんなに怒ってらっしゃるのでせうか?」

明らかに『私、怒ってます』オーラが出てるのはの方を向いて質問してみる。

「どうして試合に出てたの!?!と言うかサッカーの試合行くなら起こしてよあ!?!」

いや起こそうとはしたんだよ。

でもなのはの部屋に入って起こしたら……

『なんぴとたりとも私の眠りを覚ますのはゆるさないの……』

とか言いながらレイジングハート向けられたら逃げますよね！？拳銃向けられた犯人の気持ちがわかりましたよ。

「そんなことしてないもん！？」

「したから起こせなかったんだよ……ユーノもな。」

最後は小声で言いながらなのはを軽くあしらいながらアリサ達に

「とにかく。今日は応援ありがとう。やっぱり女の子の応援は力になるからね」

実際チームのみんなもギャラリーの声にかなり反応してたしねえ

「当然よ！！私達が応援して負けるなんて許さないんだから！！」

「あはは、こちらこそありがとう。ナオトくん。」

「まあ、なのはは力にすらならなかったがな。」

「なんで！？」

「いやねえ、遅れてきいて……」

「うそうそ。ちゃんと力になったからそんなに拗ねんなよ。」

「むうう！！」

「なのはってこんなキャラだったけ？」

「きつとナオトくんが弄るからじゃないかな。このなのはちゃんも可愛いけどね。」

ん？なんか2人とも言ったかな？

「おい。お前!!」

あつ。そう言えば居たね。大崎が。

「俺を無視してなになのは達と話してんだ!!」

いや、別にお前と話したくないし……

「新一うるさいわよ！あつちの人たちと話してなさいよ！」

だってよ。あつちの人たち。

ん？なに玄間？

”こ・っ・ち・に・こ・さ・せ・ん・な。”

俺にどうしろと言うんだお前は……

「そんなこと言って、恥ずかしいんだろ、アリサはww」

「新一君。少し離れてくれないかな。」

すずか、言うね。

言葉にトゲが見え隠れしてるよ。

「新一くん。近くに來ないで欲しいの……」

ボソボソといってるけど聴こえてるよ、なのは。

「もう、みんなしてツンデレだなあwwハイハイじゃ、あっちのモブ達と話して来るよ。なんかあったら俺が助けるから呼ぶんだぜ！んじゃ、ノシ」

そう言つて大崎は玄間達の方に向かつてた。

忠和、玄間。御愁傷様。あいつらに向かつて合掌する。

さっきの仕返しじゃ、ウケケ

……それにしても最後の方はなに言ってるかわかんなかったぞアイツ

「なのはの呟き聴こえてなかったのかしら？」

「聴こえててもわかんなかったんじゃないかな。」

すずか、サラツとひどいこと言うね……

”ごちそうさまでした”

おっと！

皆出てきたな！

「皆！！今日は良くできた試合だったぞ！！また練習頑張つて、今度の大会も勝とうな！！」

”ハイ！！”

どうやら解散みたいだな。よし、じゃあミドリヤの手伝いの準備を、

つていだ!?

「じゃあな、ナオト。また今度遊ぼうぜ。」

「忠和、頭叩きながら言うんじゃない、いだ!？」

「その通りじゃ。ワシらが町を案内しやる!! 楽しみにしてくん
じゃなあ!!」

「玄間も……、叩くな、いだ、いだ、いだだだだ、みんなして帰
りに頭に叩いてくんじゃねえよ!？いてえだろ!？」

「じゃな。今後遊ぼうぜ!!」

「サッカー教えてくれよ。期待してるからな」

「ねえねえどんり、ゴメンふざけすぎた。だから拳握りしめて振り
かぶらないで」

いろいろ言われたが最後は皆で笑って解散した。
つたく、頭腫れちまうだろうが。

ヒイン

「!？」

!？、なんだ今の感じ!？

「どうしたのなの？」

アリサがユーノをなのはに返しながら聞く。
つかユーノで遊んでたんかお前らは……

「ううん。なんでもないよ。」

でもなのはもなにか気づいたみたいだし確認しとくか。

『なの……』

「じゃあ私達も解散？」

「そうしようか。」

「あつ皆午後から予定があるんだっけ。」

「お姉ちゃんとお出かけ」

「ハパとお買い物」

話しかけられる雰囲気じゃねえし……

「ナオトくん。今日は疲れたらうつから店の手伝いはいいから、ゆっくり休みな。」

「あつはい。わかりました。」

士朗さんに言われて振り返りながら返事をした。

確かに鍛えてるからと言っても、あんだだけ走り回ればダルくはなつてたからこの申し出はありがたい。

それに連日のジュエルシード探しの疲れも抜けてないし体を休めなきゃないしな！

「女の子達も解散かい？」

「お父さん！」

「今日はお誘い頂きありがとうございます。」

「試合、かつこよかったです！」

「ありがとう。皆、迎えは来るのかい？よかったら送っていいところか？」

「いえ、迎えに来てもらいますので。」

「同じくです！」

「そうかい。じゃあ気をつけて。」

「またね また明日学校でね」

「じゃあな。また機会があったら。」

アリサ達が歩いて迎えが来るところに向かっていった。
にしても、すずかはかなり腹黒なんじゃ……

ゾクッ

なんか、殺気が来たから考えるのをよそっ……

「それじゃ、家に帰るか。お父さんはお風呂に入ってからお店に戻るから。久しぶりに一緒にはいるか？なのは。」

「もうそんな年じゃないもん。なのははレディーなの！？」

「そんな体でレディ……冗談だから睨むな、なのは。」

”次言ったら無いぞ。”みたいな視線をなのはから受けながらなのはの家に帰宅するべく歩き出した。
それにしても……

「さっきの変な感覚はなんだったんだ……？」

「ナオトくん！！早く早く」

「あつ今いく！！」

……気のせいだったら……いいんだが……

………なんか忘れてるような？

「なのは達帰っちゃった!??くそう……デート誘おうと思ったのに。まあ皆してツンデレだからなww今日は木のジュエルシードだから準備してなのはを助けて、この大崎様へのデレに持っていくぜww」

彼はこの後母親に外出禁止をくらうのまだしらない。

episode 6 後（後書き）

震災のやろう……

停電で書けなかったやろうが……

地震、二度とくんな（#、皿、）

episode 7 (前書き)

皆様すいませんでしたm () m

私は生きていますm () m

報告があるので後書きみてくださいm () m

episode 7

「ふわあ〜」

バフツと音をたててなのはがベッドに倒れ込む、でも

「なのは、寝るなら着替えないと」

着替えないと服にシワがついて大変だしね

「ん〜」

そうそう服をぬいっで!?

「あわわあわわあ」

危ない危ない!?

なのはの着替えを見ちゃダメだよボク!?

「ユーノくんもひと休みしといたほうがいいよ〜」

なのは!?!話しかけられるとよけい意識しちゃっから!?!?

「なのはは晩御飯までおやすみなさ〜い」

バフツ

ふう、終わったみたいだな……
それにしても……

「やっぱり、なれない魔法を使うのは相当の疲労なんだろうな……」

「「ボクがもつとしっかりしてれば……」」

「なんて考えてるだろ」

そうだよボクがしっかりしてればなのはに迷惑かけるなん、て

「んなこつたろうと思ったよ」

「なんでナオトがいるんだよ!？」

えっ!?!?てことは……

「ナオト、なのはの着替えを……」

だったらまずこの世界の法的機関に連絡をして

「勘違いすんなよ!?!返事がないから開けて確認しただけだから!?!」

「もしなのはが着替えてたらどうするのさ!?!」

「子供の着替えに興味なんてあるかああ!?! 俺はロリコンじゃあないっての!?!」

「年は同じくらいだからロリータコンプレックスじゃないとは思っけど……」

「正式名称で言われると途端に病気みたいな感じになるな……」

「ロリータコンプレックスは病気だよ!？」

「マジかよ!？」

「まあ、それはさておき。ユーノ、そこまで責任を感じる必要はないぞ。實際話を聞いてみたがお前自身に非はないからな」

こいつ自分一人で抱え込む癖みたいなのがあるからな、すこしガス抜きさせないと

「でも僕が怪我さえしなければなのはやナオトに迷惑かけることも……」

またか……こりゃ重症だな

「いいかユーノ。なのははともかく俺に迷惑かけてるなんて思うな。

実際問題、俺は補助系の魔法が得意じゃない。お前やなのはがいないとジュエルシード一つ封印できない。ほら逆に俺の方が迷惑かけてるだろ？」

自分の立場はれっきとした社会人、しかも管理局員だ。この世界の公安と同じで俺はこの仕事で金もらってるし、生活している。

なのに一般人の2人に捜査協力をたのんでる俺は迷惑どころか管理局的にもグレーゾーンだしな

「ナオト……でも……」

「別に気にするなとは言っていない。なのはに迷惑かけてるのは当たってるしな……ただそれは俺も同じだからな。そういう時はなのはに貸しを一つつけとくんだよ!!」

「貸し……」

「そうだ、こいつが何かしたい。困ってる。その時に全力で助けてやれば良いんだよ!!そうすりゃ貸し借りなしになる。つか貸しの貸し合いし続けるのが友達じゃねえのか？俺はそう思うがな」

「貸しの貸し合い……」

「深く考えんな。これは俺の結論だし、な……」

持論を相手に押し付けるのはクールじゃないしな……

街を歩く二人の男女

彼らはまだ12歳と小学校もでていない二人だった

「今日も凄かったね」

「そんなことないよ、ほら、今日はナオトくんのおかげでディフェンスがしっかりしてたからね！」

不意に少女が男の子に話しかけるが、男の子はその言葉に照れた様子で答えた。

「でも、かつこよかったあ……」

そう言われて男の子は照れて言葉がかえせずにただ微笑むことしかできず、それに気づいた少女も微笑みかえした。

「あっそうだ!!」

ふと少年はあること思いだし少女に声をかける

「はい。」

「うわぁ、綺麗!!」

「ただの石だとは思っただけど、綺麗だったから……」

少女が少年の手の上にある石を取ろうとした瞬間
その石が激しく輝き始めた

「えっうわぁぁぁ!?!」

「きゃぁぁぁ!?!」

この世界の人間が、道端に落ちている石が世界を破滅する力を持っているなどわかるはずもない
奇しくもそれは2人の”ずっと一緒に居たいと言っ願ひ”によって
発動するとは皮肉なことであつた

全く、余計なことまで言つちまつた……
後で考えてみるとかなりハズイこと言つてたな

「ナオト、僕は僕なりになのはやナオトに借りを返せばいいんだね
……僕の答えはまだでてないけど、出たその時は!?!?」

っ!?!?

この反応は!?

「連チャンでジュエルシード発動しすぎだろ!?!一度お被いしても
らえよこの町!?!」

ふさあ

「なのは!?!」

「気づいた!?!」

「こんだけの魔力歪みだ!?!気づかないわけないだろ!?!急ぐぞ!」

いくら魔法使いはじめて数日でも魔力があるやつは誰でもわかるく
らいの空気の歪みだ、こりやもしかしたら……

「うん!そうだねナオト……く……ん……」

「なにやってんだ!?!早くしろって!?!」

「そうだよなのは!?!急がないと!?!」

口をパクパクさせて俺を指差しながらフリーズしてるなのはに声を
大きくして告げる

俺の勘はいつもは当てにならないが”嫌な予感”は外したことがな
い……

本当にやにn

「なんでナオトくんが私部屋にいるの!?!」

は？

.....

いまさらあああ！？

「あと早く出てってよお！？」

「んなあ、急げって言ってんだろが！！」

「着替えるからでてけええええええ！？」

急いで階段をかけおりて出かけ用としたときに土郎さんから声がかかる

「なんだあ？なのは、一緒入るか？」

エコーの具合から風呂場からのようですね
つか、さっき断られたでしょうに

「ごめんお父さん、なのは達、ちょっとお出掛けしてきます!!」

「俺とユーノも一緒なので心配しないでください!!」

「!?!まさかジュエルシードかい!?!」

もう察したんですか!?!

「なら気を付けて行ってきなさい!ナオトくん!!なのは達を頼んだよ!!」

「はい!!命に変えても守ります!!行ってきます!!」

「じゃあ気を付けて……」

「……はあ、子供の成長ははやいなあ……俺も歳をとったもんだ……」

なのはやユーノと急いで高層ビルの屋上から街の様子を見ようと屋上まで駆け上がり

「レイジングハート!!おねがい」

>stand by ready<

「なんでこんな時だけ足速いんだよ!? ああもう、SU1セットアップ!」

>yes master set up<

さて、この現状は予想外だぞ

「酷い……」

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持ったものが願いをこめて発動させたとき、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから。」

やっぱり俺の”悪い予感”が当たってたか……
こんな固有スキルはいらねえよバカ野郎が……

「あつ!?!」

「? どうしたなの?」

「やっぱりあのときの子が持ってたんだ……私、気づいてたはずなのに……」

なっ!?!

気がついてただと!?!

ならあん時の違和感はジュエルシードで間違いなかったのか!?!

くそつたれ……

「気づいてたとかは後だ!!」

ユーノ!! 呆けてないで結界はれ!!

これ以上一般人に見られるのはマズイ。被害を押さえるためにも早く!!」

「そうだね!? 今構築する!!」

そう言うとユーノはすぐに結界魔法の展開をした。

いつ見ても展開スピード、術式の精密さはAAA魔導師クラスだな。

「ユーノ!! ジュエルシードの位置はわかるか?」

「近くにあるのは感じるけど詳しい位置までは……」

「近くにはあるんだな……」

なら、SU1!!」

>了解ですマスター<

「っ!? なっなんだと……」

「どうしたのナオ……うわ……」

「二人ともどうし…… なっなおとくん!?!」

「言うな…… 言わないでくれ……」

「でつでも…」

なんで、なんで

「なんでSU1がピコピコハンマーになってんだよおおおおお
お!？」

> 今回の原因もわかりませんね、諦めてくださいマスター<

「ナオト君……ぷつ。」

「なのは、てめえ後で裏こいや……」

「ナオト!今はそれどころじゃないから!」

っ!？そうだった!!

SU1はおかしくても魔法を使うときの魔力の流れはいつもどおり
みたいだし展開はできるはずだ!!

「SU1、エリアサーチ!」

> area search <

「ナオト!？補助魔法苦手なんじゃ!？」

ユーノが驚いてるようだが確かに俺は補助魔法が苦手だがサーチ系
統の魔法は俺のレアスキルの関係上そこらの補助魔導師の上をいく
んだな、なぜだか

「みつけたぜ！！南西方向の中心に見える大木のとっぺんから5メートル下の枝の左側だ！！」

「そんな細かいところまで……」

「みつけただけだしあそこにいく方法がないんだよ！！」

不味い、一刻も早くしないとユーノの張った結界が破られちゃう！？

「私にまかせて！！レイジングハート！！」

> yes master <

そんな八方塞がりのなかで二人？の声はよく響いて聞こえた……

episode 7 (後書き)

活動報告にも書きましたが。

ISの小説を書こうかと……

できればyesかnoを感想かメッセージにくださいますか
m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040o/>

リリカル転生記

2011年7月7日03時54分発行